



KAHF ニュースレター

〒606-8536 京都市左京区粟田口鳥居町2-2 京都市国際交流会館3階

財団法人 京都国際文化協会内

京都ホストファミリー協会 (KAHF)

No.20

2021年 3月発行

新型コロナウイルス禍の影響

2021 年度 行事予定

4月

ウェルカムパーティー

5月

春のハイキング

6月

料理教室

10月

大原バーベキューパーティー

11月

秋のハイキング

2022年1月

新春親睦パーティー

2月

甲揚げ大会

3月

総会・会員の集い

昨年新型コロナウイルスに明け暮れた一年でした。一昨年12月に中国の武漢で発生し、その強い感染性で瞬く間に全世界に拡散しました。日本で最初の感染が報道されたのが昨年の1月中旬だったと思います。人から人への飛沫感染が中心とのことで、三密（密閉、密集、密接）を避けることの重要性が指摘され、具体策としてアクリル板での遮蔽やマスク、フェイスマスクの着用とうがいや手洗いの励行が勧められた。これらは我々がこれまでの社会生活において基礎となる人と人との接触を制限するものであり、なかなか実現することが難しい。今回のウィルスはある意味で人間の社会活動に対して根源的なチャレンジ（自然からの報復？）をしてきているものとも言える。

KAHFへの影響としては、先ず申し込んでくれた留学生が例年（50名以上）に比べて非常に少ない16名だった。これはコロナ禍のために来日した留学生が激減したためと、ウェルカムパーティーなどKAHFを知ってもらう機会が殆ど持てなかったためであろう。次に申し込んでくれた留学生に対しても、個人レベルでの留学生とHF、B/Sとの密接な交流が困難であった。更に例年10回程度の全体としての活動をしてきたが、残念ながらこの1年間殆どの活動を中止せざるをえなかった。多くの企画はあったが、実行できたのは10月の宝ヶ池ハイキングのみであった。

このコロナ禍がどうなっていくかを予測することは難しい。この原稿を書いている時点（2月22日）で、急増した第3波は漸減しつつあり、緊急事態宣言も緩和される方向である。ワクチン接種も始まったので、コロナ禍の収束が待たれる。しかしながら、新しい変異種も種々拡大しており、第4波の襲来も否定できない。完全な終息は望めないかも知れない。我々もウィズコロナ時代に適合したKAHFの活動内容と態勢を組みなおす必要がある。

（世話人代表 谷垣昌敬）

2020年度会務報告

2020年度に16名の新しい留学生(No. 2147~2162)を受け入れて、HFとB/S会員をマッチングしました。新しい留学生が少なかったのは、新型コロナウイルス禍のために来日した学生が少なかったためと、ウェルカムパーティーなどの行事が実施できなかったためです。

2020年度に新たに4名のHF会員(No. 492~495)の入会がありました。よろしくお願いします。また5名の会員が退会されました。これまでのご協力に感謝します。この結果、現在活動中のHF会員は96ファミリーとなりました。

2020年度にBrother/Sister(B/S)プロジェクトへの新規登録はありませんでした。B/S会員は卒業・就職などで自然退会も多く、現在の活動会員は約20名です。

KAHFの活動はHFおよびB/Sと留学生の1:1の交流が中心です。この1年間各HFは工夫を凝らして新型コロナウイルス感染の予防措置を工夫して交流をしました。予定した全体での行事は殆どキャンセルせざるを得ず、実施できたのは少しコロナ禍の落ち着いた10月4日の秋のハイキングのみでした。

行事報告 2020年3月 ~ 2021年3月

KAHF 秋のハイキング 2020年10月4日(日) @宝ヶ池

新型コロナウイルス蔓延のために半年の間KAHF全体としての活動ができなかったが、やっと少し先が見えてきたので、宝ヶ池への軽いハイキングを計画した。予定を超えるHF、B/Sおよび留学生の合計38名が参加した。地下鉄の「国際会館駅」に集合し、宝ヶ池の半分を回って昼食をとった。散歩の途中、野生の鹿の出迎えもあった。全員マスクをして、Social distanceを気にしながらのハイキングであった。昼食の後、若い留学生とB/S会員はボート(通常の手漕ぎボートまたはペダルボート)を楽しんだ。その後解散となり、松ヶ崎駅へ降りるグループ、プリンスホテルを経て国際会館駅へ戻るグループ、更に足を延ばして円通寺へ行くグループに分かれた。一日中曇り空だったが、気分のよい散歩日和であった。



一私の国と日本— 異文化交流をしてみよう

京都教育大学 セリウエルストワ テチャーナ

見ず知らずの人と会話を始める前に、私は初対面のマナーを守りながら、「初めまして、セリウエルストワ テチャーナと申します。ウクライナから参りました。よろしくお願ひいたします」と言います。そうすると、例外なく「ウクライナは寒い国ですね!」という返事が返ってきます。おおざっぱに言うと、ウクライナの気候は日本と殆ど同じです。一年に四季があって、それぞれの季節の温度差を凄く感じます。春はウクライナで桜は咲いているかどうか知りたい人もいるかもしれません。それぞれの家にサクランボの木があって、日本の桜と同じように綺麗に咲きます。でも花見に行く習慣は一切ありません。私の国にはこの習慣がないから、ちょっと日本がうらやましい気がします。夏は、とても暑く、30度以上になることが多いです。秋は木の葉は紅葉しはじめて、麦畑でたくさんの作物を収穫できます。冬は、最近、地球温暖化のために雪があまり降りませんし、零度以下に下がる日も少なくなりました。この話を聞いても、まだウクライナはとっても寒い国だと考えている方はいらっしゃいますか。つけ加えると、ウクライナの首都のキエフは京都と姉妹都市交流をしています。実は私も日本に来る前に、日本の社会に関して色々な先入観がありました。例えば、平均的日本人は恥ずかしがり屋で、ロボットのように、内面の感情をあまり表さないと思っていました。ですから日本に来たばかりの時、日本人のように、日本語でペラペラしゃべられても、外国人にとって日本人の友達を作るなんて無理だとよく耳にしていました。でもこれは間違っている意見だったと私は認めます。多くの日本人は西洋諸国の文化に興味があり、留学生と話す機会があれば、積極的に会話に入ったり、遊びに行ったりすることが大好きでしょう。ところで私は方向音痴で、すぐに道に迷ってしまうタイプですが、ある日いつも通りにどこに行

ったらいいのか分からなくなって、グーグルマップをじっと見ながら、歩いていました。急に見知らぬお爺さんが近づいてきて、「失礼します。お嬢さま、迷子になっちゃたようですね。お手伝い出来たら、嬉しいですよ」ということをおっしゃって、ご親切に道を教えてくださいました。お願いしてもないのに、助けてくださる人に初めて出会った私は本当に嬉しくて、感謝の気持ちがいっぱいになりました。私の国ではこういうことを体験することはありませんよ。一般的に慣れた環境では驚かされることはだんだん減っていくとよく言われています。私は逆に日本で生活をすればするほど、自分にとって不思議なことに出会っています。ファッションや食文化やコミュニケーションの特徴を見て、自分の国とどのように異なっているのかを比べるのを楽しんでいます。冬には日本の若者は薄着で出歩いているので、寒くても、構わないのかなと私はいつもびっくりしていました。ウクライナ人は風邪をひかないように、わざと何枚ものセーターを着たり、必ず帽子をかぶったりします。もちろん日本で生まれ育った人にとって、国内における全てのことは当たり前で、何とも思わないでしょう。しかし外国人はそれに対して、もし日本の歴史と文化背景を持っていなければ、カルチャーショックを味わうに違いありません。このあいだ寮で聞くともなく日本人の二人の面白い会話を聞きました。「今朝いい響きでしたね。バイオリンを弾いていました?」ということ日本人の女の人が言いました。相手の日本人学生は「ありがとう」の代わりに「うるさくして、ごめんなさい」のような返事で答えました。なぜ謝ることが必要なのか私はずっと考えました。後で先輩が説明してくれたのは、相手の気持ちを大事にしている日本人は言いにくいことでも感情を傷つけないように、できるだけ直接的な表現を避けるようにしているということでした。

褒める表現を使っても、必ずしも褒める意図を持っているとは限らないということも知りました。しかし私は日本人の意識は分かりにくいのではないのでしょうかと強く言いたいです。ウクライナ人は断りたいとか文句を言いたいならば、一般的に言いたいことをはっきりと述べます。ほのめかすだけなら、相手に本当の気持ちがあわかってもらえない可能性が高いからです。しかし私が異文化交流を通して学んだことは、人間は馴染みのない環境に接していても、新しいルールと習慣に満ちた魅力的な世界に入ることを楽しもうと思っています。そしてコミュニケーションのマナーやファ

ッションと自分の価値観などが違っていても、いずれにせよ共通のものが一つあります。それは心のやさしさです。あの日どうしてお爺さんに道を案内して頂いたのかあまり分かりません。私の困っている姿を見て、黙っていられなくなったのでしょうか。それとも寂しくなって若い女性と話したかったのでしょうか。いかなる場合でも お爺さんの親切な行為に私は強く心を動かされました。優しさは、世界中の人々をつなぐグローバル言語のようなものだと思います。私は皆さんとこの言語で話せることを強く願っています。

寄稿②

私の国と日本、私の国：ブラジルと日本

京都教育大学 加藤ジェシカナタリア

生まれてから今までの日本についての考えの成長を三つのステージで述べたいと思います。第1：何で私は日本人の顔をしているの？第2：何で私は日本語ができないの？第3：もっと日本語と日本文化を知りたいと言うことです。

第1について説明します。私は日系ブラジル人3世です。ブラジルに生まれ育った私の第一言語はポルトガル語です。最近、特にアメリカ大陸とヨーロッパ大陸で生まれたアジア系の人びとをバナナと呼ぶ人が多いです。その理由は外見が黄色だけど中身は白いからです。子供の時私もバナナだったと思います。両親はブラジルで生まれたので、全然日本語が喋れません。

「ご飯」とか、「まくら」などの日常生活の単語を使いますが簡単な会話すらできません。でも学校ではいつも外国人と見られました。「そのような小さい目でちゃんと見えますか？」と私に聞いてきました。自分の名前の代わりに「日本人」「日本」というあだ名で呼ばれました。その頃「なんでこのような顔をしているのだろう」、「他の子ども達のように見られたい」、「この小さな目なんていらぬ」とよく考えたものでした。

しかし11歳の時に転機が来ました。それが第2ステージです。11歳の時は2008年、ブラジル日本移民100年の年でした。その記念日を祝うために私の小さな町でいろんな活動が始まりました。太鼓、盆踊り、カラオケ、そして日本語学校開設でした。その時まで正直に言うと日本に全く興味がありませんでした。他の日系人と出会って、J-pop、日本ドラマに触れて、もっと日本のことを知りたいと思うようになりました。「なんで私は日本語ができないの？」という疑問が湧きました。その時サンパウロ市の大きな日本語学校のイベントに参加して、日本語を勉強している人たちと出会いました。ブラジル中やアルゼンチンの学生たちがいて、100人の学生たちと4日間いろいろな日本文化の活動をしました。藁草履の作り方を学んだり、運動会をしたり、日本語の劇をしたりして、楽しく過ごしました。そこで同じような年の日系人に会い日本語がペラペラなのにびっくりしました。私の頭の中で「すごい！」とか「うらやましい」という考えが生まれました。そして何で私の家族は私に日本語を教えなかったのかと疑問を抱きました。

しかし移民について勉強するうち、いろんなことが理解できました。例えば、第二次世界大戦の時にブラジルで日本語を話すことが禁止されました。そのためブラジルでポルトガル語が話せなかった日本人はずごく苦勞しました。配給の食べ物をもらえませんでした。強制移住させられた人もいました。それで祖父母は自分の子には苦勞させずにもっと楽な人生が歩めるように日本語よりポルトガル語の方が重要と考えて日本語を教えなかったのです。

そういう祖父母の気持ちがわかって、私は第三ステージを考えました。日本に来て大学の寮で他の留学生と一緒に生活を始めました。同じ留学生だけど私は彼らと違うことに気づきました。私の家族は日本語を教えなかったけど日本の味を教えてくれたことに気づきました。食べ物の名前が分からなくても何となくその味は私にお母さんの味を感じさせます。そして、お寺に行った時の線香の香りは懐かしいおばあさんの家の香りを思い出させます。親戚がよくない時に家族みんなでお見舞いします。その時に日本語はなくても根付いた日本文化を家族が教えてくれていたんだと気づかせます。今祖父母がなんとはなしに日本文化を伝えていたことを知って感謝の気持ちであふれます。ブラジルに生まれても日本の国籍がなくても何となく日本は私の祖国です。二つの文化で育った私は両方の良い部分を選択できます。

今私は祖父母の国に立っています。日本に残る時間は3ヶ月しかありません。行きたい場所はまだまだたくさんあります。特に沖縄へ行きたいです。なぜならおばあさんは沖縄出身で戦争の後ブラジルに移りました。おばあさんの人生の話はよくお母さんから聞きます。例えば、卒業式の日アメリカ軍の爆撃があっておばあさんは防空壕の岩穴の中に隠れなければなりません。私はおばあさんのその時の気持ちを聞

くとすごく大変だったと思います。おばあさんは今89歳です。いろいろ話が聞きたかったけど言語障害があり、聞けない気がします。でもおばあさんの故郷に行き、いっぱいいろいろ体験してみたいです。そしてブラジルに戻ってから上達した私の日本語でおばあさんにたくさんの話を聞かせてあげたいと思います。新しい沖縄の写真を見るとおばあさんはびっくりすると思いませんか。

★ファミリーから

7月5日女子留学生日本語弁論大会が長岡京市中央生涯学習センターで行われました。この大会は毎年国際交流会館イベントホールで行われていますが、今年はコロナ禍のため急遽規模を縮小・会場変更し行われました。毎年アジア諸国を中心に各国の大阪領事館が後援され来賓として見学されています。京都大会の優勝者は近畿大会に進み、全国大会へと駒を進めます。

今回の最優秀者にセリウエルストワ・テチャーナさん(ウクライナ、京都教育大)二位に加藤ジェシカ・ナタリアさん(ブラジル、京都教育大)が選ばれました。スピーチ原稿は聴衆を意識した話し言葉でわかりやすいのでご一読ください。テチャーナさんは近畿大会でも優秀賞を獲得し10月の全国大会の出場資格を得ましたが、9月初旬の帰国のため残念ながら権利を返上しました。

二人とも日本初来日で日本語学習歴も三年未満ですが、テチャーナさんは村上春樹の「ノルウェイの森」を日本語単行本で読み切る努力家、ジェシカさんは祖父母が沖縄出身の三世です。留学中には子供食堂に来る在留ブラジル人の子供に関わっていました。

(仲村邦彦)

KAHF入会から留学生とのかかわりまで

～～ タイのファーンさん ～～

H F 島田弘子

2018年夏、いつものように京大ルネで昼食後、KAHF（京都ホストファミリー協会）のたて看板が目にとまりました。「あら、面白い!!」と読んでる横から谷垣先生が「いかがでしょうか?」と勧誘、二つ返事で入会させていただきました（笑）。余談ですが、海外大好きな私は、アメリカ3回、フィンランド2回、カナダ、イギリス、スイス、オーストラリア、韓国、ベトナムに行ってます。これは3年に一度の歯科衛生シンポジウム参加のためで、観光での海外はお財布が許しません（笑）。

入会時より、高橋さんはじめ他の皆様との交流も楽しく、あっという間の3年間でした。

最初のサポートは中国医学生、星星さんでした。勉強に忙しいのか新春パーティーの浴衣着付けのみのご縁でし

た。同じ医療系の話ができるかと期待してたのですが……

2人目はタイのファーンさん（女性）、とてもシャイな方で、でもユーモアたっぷり、ずっと笑えばなしで毎回会うのが楽しみです。そこへコロナ、いきなりのおこもり生活、彼女の帰国も近づき、LINEばかりの交流でもやもやします。浴衣着付け、たこ焼き食べ放題チャレンジ、タイ料理、長ぐつを買うか買わないか!!寒い時の服装、たわし身体洗い等、楽しいエピソードに事欠きません。大好きな「カレーうどん」にトライはまだ果たせてません。

日本のおっかさんは、まだまだ夢を持っています、ファーンさん。



平素、KAHFの活動にご尽力頂き、有難うございます。お陰様で、2019年度もいろいろな行事や個々の付き合いを通して、留学生との交流を深めることができました。今年度の活動をまとめたニュースレターを作成しましたので、どうぞお受け取り下さい。なお、ニュースレターはホームページでもご覧いただけます。行事予告などはホームページやフェースブックでも行っています。

ホームページ URL : <http://kahf.web.fc2.com/>

フェースブック グループ名 : KAHF (Kyoto Association of Host Families)